文化財だより

第７号

平成６年３月

発行　真鶴町教育委員会

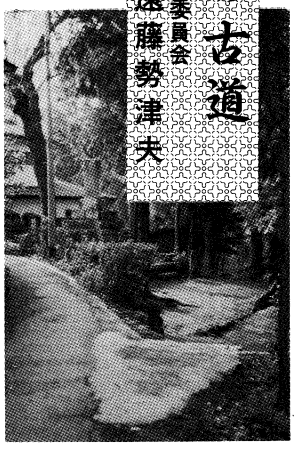
特集

真鶴の古道と文化財

(一) 岩地区

真鶴の古道

真鶴町教育委員会
教育長　遠藤勢津夫



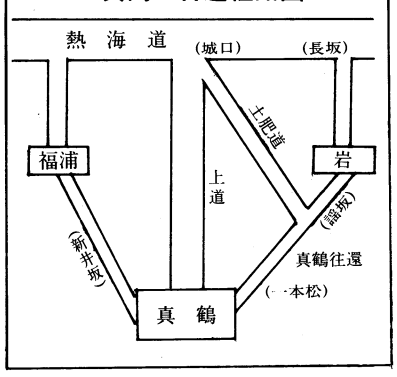
江戸時代の真鶴の道路は、村から村を結んでいる幹線道路と、村内の生活上の道路の二種類にわけることが出来ます。

幹線道路としては、小田原から熱海に通ずる「熱海道」が、岩村・真鶴村の北辺を東西に横切っており、現在の国道一三五号線は、ほゞこの熱海道に沿ったものです。岩・真鶴の集落は、この街道からはずれておりましたから、熱海道から長坂で分岐した岩道が岩村の宿仲へ通じ、さらに謡坂から一本松を経て真鶴村の宿仲に至り、新井坂をこえて福浦村に至る真鶴往還が通じておりました。他に謡坂から分れた土肥道と、真鶴宿仲からのいわゆる上道は、ともに城口で熱海道に合体しておりました。これらの経路を図示すると別図の通りです。

こうした幹線道路の他に、村々の日常の生活にかかわる道路が縦横に発達しておりました。それらのほとんどは現在の私達の生活の中に生きており、随所に往時の名残りをとどめております。例えばこのたび神奈川の古道五十選に選定された「岩・専祖畑道」は、石材搬出に利用された産業道路の遺跡として貴重な価値を有するものです。

ふだん何気なく歩んでいる道も、こうした観点から見直してみますと、思わぬ歴史の再発見につながることが多いことと思います。

真鶴の古道経路図



目　次

特集　真鶴の古道と文化財 (一)
真鶴の古道
教育長　遠藤勢津夫……(1)

岩道に沿って
岩道について……(2)
瀧門寺と如来寺跡……(2)
児子神社……(2)
船出の浜・鮫追船……(3)
岩地区内の原始遺跡……(3)

土肥道を行くと
土肥道について……(4)
謡　坂……(4)
丸山丁場……(4)

専祖畑道を歩いて
専祖畑道について……(5)
口開丁場……(5)
石工先祖碑……(5)
道祖神……(5)

郷土研究・郷土学習
真鶴町の過去・現在・未来
真鶴中学校　一年三組……(6)
社会科の学習から　真鶴小学校(6)
楽しい郷土学習　岩　小学校(7)

文化財ミニ便り
小早船の補修工事……(8)
文化財の寄贈……(8)

編集後記……(8)

岩道に沿って

岩道について

新編相模国風土記稿には、岩村の部に、「熱海道南北に通ず。此道の中程に岐路あり真鶴村に出る道なり。」と記されています。

現在の国道一三五号線にほぼ沿った熱海道は、町営長坂住宅のところで二分され、長坂を下り岩村の宿中を通り謡坂を境にして南に下る真鶴往還と、駅方面（城口）につながる土肥道へとつながっています。この熱海道分岐点から謡坂に至る道が岩道です。

長坂の分岐点には、『右あたみみち　左いわむら、安永二年』（安永二年は一七七三年）と記された道標があります。道標は昔の道路を示すとともに村落の発展の跡を物語ってくれる大切な民俗資料で、町の重要文化財に指定されています。

道沿いには、古くからの遺跡や、神社仏閣等の文化財が点在しています。

瀧門寺と如来寺跡

伊豆韮山町の昌渓院を本寺とする曹洞宗の寺院であり、古い時代には密宗で弘法大師によって開創されたと伝えられています。天正元年林屋という僧により中興開山され、現在のような曹洞宗の寺院として体勢が整えられはじめました。

本尊は釈迦牟尼仏の木仏で脇侍は文珠菩薩と虚空蔵菩薩です。江戸中期には末寺六ケ寺を擁する寺院として整備されました。天保年間に調査されたときの御調書上帳によりその当時の寺院の規模や様子を知ることができます。

本堂の裏には、大きな滝が流れていることで有名でしたが、大正十三年の大地震のときに水が止まってしまいました。滝の流れた跡も国道一三五号線の工事によってよう壁の下になってしまい今はその跡を見ることができません。

門前には十三世の鳳州了梧のときに建立された宝篋印塔があります。小松石によって作られた石の塔としては関東随一のものといわれています。

岩海岸の大浦と呼ばれる場所には瀧門寺の末寺であった如来寺の跡地があります。明治の時代に火災にあって本堂は無くなってしまいましたが、境内地跡の洞窟は今も残っていて中には十王像や聖観音菩薩像がまつられています。

瀧門寺の末寺として月山和尚によって開山されました。本尊は但唱という僧によって作られたという阿弥陀仏の石像で長さ三尺五寸（約１ｍ６cm）の大きな石像であったそうですが、明治の廃仏毀釈のときに破壊されてしまったということであります。

四年程前に如来寺整備事業を進めているときに阿弥陀仏安置と彫られた大きな石が発掘されました。これにより、言い伝えられていることは事実であることがわかります。

如来寺の財産を書き上げた校割帳が瀧門寺に保存されていますが、この校割帳に記載されている殿鐘は、いまも瀧門寺で現役として使われています。この鐘の銘文の中に相陽の僻谷祝里という言葉がでてきますが、これは、かって岩村を祝村と書いたこともある証拠になります。

児子神社

天保年間に火災のため古い記録を失ってしまいましたが、延喜年中の創立といわれており、祭神は惟喬親王とその御子神であります。

惟喬親王は岩村の光西寺という寺に長い間留まられたのでのちにその霊を祭ったのだと伝えられています。

瀧門寺の階段下に保存されている五層の塔には「岩松山光西寺」と彫られており、児子神社の付近にあったのを現在の場所に移転したものです。天保年間の調査のときは既に廃寺となっていましたが、たしかに光西寺があったことを証明する遺物であります。

また、もとの岩小学校はいま社が建っている付近にありましたが大正の大地震で校舎が壊れてしまったので現在の場所に移転しました。

境内には竜神社、飛地境内には稲荷神社、津島神社、山神社などがあります。

船出の浜　鮫追船

真鶴町の岩海岸は「源頼朝船出の浜」として知られていますが、源頼朝という中世の武将が岩の浜から船出したことにどのような意味があるのか、歴史をふり返ってみますと、

保元・平治の争乱（一一五六～五九）によって滅ぼされかけた源氏の再興を期した頼朝は、治承四年（一一八〇）八月配流の地（伊豆国蛭ケ小島）から兵を挙げ、東国を目ざして進みます。が、石橋山（小田原市南峰）で平氏方大庭景親の軍勢に迎え討たれて惨敗しました。これが世にいう「石橋山合戦」です。

頼朝の手勢は散り散りになり、土肥山中（湯河原町後背）を逃げ回った末、房州（千葉県）に兵を温存している三浦氏と合流して再起をはかろうとしました。そのために残された唯一の方算として、八月二十八日、頼朝ら一行は岩海岸から房州へ向け脱出をはかり成功します。これが「頼朝の船出」で、ほとんど奇跡に近い成功だったといわれます。頼朝らは文字通り九死に一生を得たわけですが、その陰には忠臣土肥実平をはじめとする土肥の住民らの協力援助があったからだとされ、その時の模様を『新編相模風土記稿』（徳川氏の編誌）は次のように伝えています。

「治承四年八月二十八日、頼朝がこの浜へ落ちのびて来て、海上二三町ほど漕ぎ出したところへ、大庭方の軍兵が追って来て、住民にあの船は何かとたずねると、住民はあれは鮫追船で、漁のさまたげになる鮫を追いはらう船だと言いつくろって答え、追手の者はそれを信じて引き揚げたので、頼朝らはあやうく難を逃れることができた。それで頼朝は天下を制した後、住民の功労を賞して岩村の船三艘に「鮫追船」という名目で舟役（船の税）を免除する特典を与えた。その後小田原北条氏のころもこれにならって舟役を免除した証文（北条氏朱印状）が村内に伝えられている」

鮫追船

この鮫追船の舟役免除のならわしは江戸時代もつづき、岩村漁士舟の特権として村民の誇りとされました。「北条氏朱印状」は真鶴町重要文化財に指定され、教育委員会に保管されています。

岩地区内の原始遺跡

真鶴には縄文時代早期から古墳時代後期までの遺跡・古墳がいくつかありますが、岩地区内にあるのは、

①沢尻遺跡　有料道路料金所の山手高台に二か所土器散布地があり、縄文前期のものといわれますが、現在は散失しています。

②上野遺跡　真鶴駅前からの道が謡坂にかかる手前、道をはさんだ両側にあり、以前畑地から縄文後期のものが発見されましたが、現状確認は困難です。

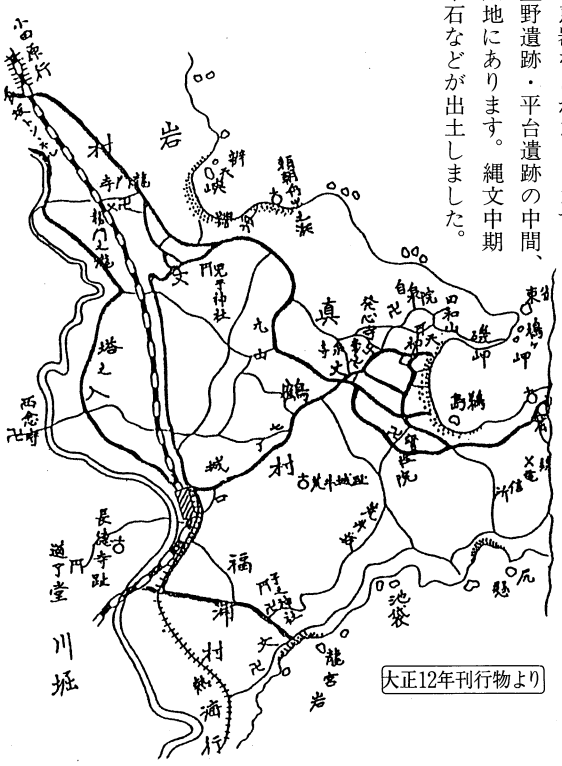
③平台遺跡　横浜国大臨海実験所構内を中心とする地域ですが、現在は散失しています。縄文前・後期のものの他に弥生式の土師器・須恵器などがまじります。

④謡坂遺跡　上野遺跡・平台遺跡の中間、岩漁協裏手の畑地にあります。縄文中期の土器片と黒曜石などが出土しました。

⑤平台古墳群　平台遺跡のそばに、以前は一〇基ほどの古墳が発見されましたが、今は確認できません。

沢尻遺跡はおそらく戦時中の軍施設の構築、その他はいずれも住宅建設の際の不手際により消失したと思われ、今となっては悔まれます。

真鶴の昔の道



土肥道を行くと

土肥道について

謡坂の碑のところより、現在のバス道路を「土肥道」「役場前」と通り、真鶴駅近くの城口に至る道（町道一号線）が土肥道で、昭和初期に拡幅工事が行なわれたとのことです。

道路沿いには、史蹟「謡坂の碑」があり、役場近くでは、左手下、町民センター付近一帯が丸山丁場あとになります。

町民センターの中庭には、丸山丁場あとの案内版や、刻印のある石などが置かれています。

右手高台からの専祖畑道とも交わっており、石工先祖碑の案内碑もあります。

謡坂

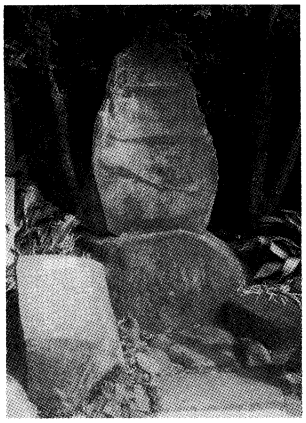
真鶴駅からの岩行きバスが、岩海岸へ下ろうとするところにバス停「謡坂」（うたいざか）があり、その道端に「謡坂之碑」という石碑があります。この近くに別荘をかまえた高井徳蔵さんが、昭和九年（一九三四）に建てたもので、

「平治の乱に敗れた源氏の再興をはかって挙兵した源頼朝が、治承四年（一一八〇）石橋山の戦で苦戦を強いられこの地に来て敵方の追撃を逃れ得た喜びに、忠臣土肥実平らと謡歌乱舞した旧跡で、それから坂の名となったと伝えられる。」

という『相模国風土記稿』の記事にもとづいた内容の碑文が刻まれています。

頼朝の手勢が石橋山から椙山（湯河原町）を経て、岩海岸から安房国（千葉県）へ向け船で脱出したというのは確かな史実ですが、この場所で頼朝ら主従七騎が、世に言われる「土肥焼亡の舞」を謡い舞ったかどうかは、さだかではありません。

ただ地元では、古くからこの坂を「オトザカ・オトウザカ」（つづら折りの坂という意味との解釈もあります）と呼ぶならわしがあり、語音が似ているところから、いつしか「謡坂」の名が生まれたものと思われます。



丸山丁場

慶長年間（一六〇〇年代初め）にはじまった江戸城修築に要する大量の石材採取地として、岩・真鶴地方の海岸地帯には、徳川御三家（水戸・尾張・紀州藩）をはじめとする大名直轄の採石場が開かれ、「御石場」と呼ばれました。

その中で、丸山地区（ポップマートから町民センターにかけて）は、御三家の石丁場が境を接してありました。その境界の目印と思われる「水戸殿石場」と刻まれた石柱が、マート道向かいの藤沢さん宅地内に今も立っています。

当時の石丁場の多くは、積出しに便利な海岸に開かれていますが、この丸山丁場は内陸のしかも窪地にあるので、ここからの石材の搬出は大変な労力を要したと思われます。

古い記録によれば、ここから真鶴小学校北側の一本松まで斜面を引き上げて、尾根づたいを磯崎山まで運び、そこから一気に海岸へ下ろすといった道順で石が運ばれたようです。運搬方法としては、大石は牛車で、小石は人足が「しゅら」を使って山越えし「はとば」まで運び出したとあり、磯崎には「はとば」と呼ばれる石材積出し用の岸壁がつくられていたようです。

江戸築城といった大口の石需要が一段落した後は、産地の村々に御石場の保管を委託されるようになり、地域の村役人が「御石預り人」となります。丸山丁場の預り人は真鶴村名主の五味家で、口上書（石場の状況報告）には次のようなことが述べられています。

○先年江戸城様御石垣御用石、丸山丁場より湊の内磯辺「はと場」と申所へ引出、舟積仕候

○丸山御丁場より近き海辺は大ケ尻と申磯にて……右の磯辺荒磯にて浪立候に付、急なる間に合不申故、只今迄船積仕候儀無御座候得共、……

つまり、丸山丁場の石は前述の道筋を経て真鶴湊へ運ばれ、そこから船積みされたこと、丁場のほど近くに大ケ尻海岸があるが、波立ちのはげしい磯でふだんは積出しに不向きだということです。

専祖畑道を歩いて

専祖畑道について

専祖畑道は、『江戸時代のはじめの産業道路は、太平山の口開丁場から石工先祖碑の横を経て、役場の東の宅地を通り丸山の水戸殿石場の碑、小学校西から前記の道路につながっていた。江戸築城用石材の運搬路で、いまでも路傍や工事中の土中からこのときの石銘の入った大石が出る。すべて人力で運んだので道幅は狭かった。』と新・真鶴風土記〝道は時代に応じて変わる〟で紹介されています。

昨年「神奈川の古道五十選にえらばれましたので、町広報「真鶴」二月号や「県のたより」などでも紹介されています。

この道は、その頃の石材運搬用の産業道路であり、これらの仕事にかかわった人たちの血と汗のにじんだ道であります。

沿道ぞいには、石工先祖の碑や丸山丁場のあとの水戸殿石場の碑などもみられます。また、土肥道と交わった所や水戸殿石場碑の近くには道祖神も安置されています。

口開丁場

真鶴駅ホームから北方山側に目を向けると大きな採石場が見えます。そのあたりの地名を「口明石」(くちあかし)といい、採石場は古くから口開(くちあけ)丁場といわれます。

江戸時代のはじめから、この地域に幕府の御用丁場として、諸大名が運営した石丁場が数多くありましたが、この口開丁場もその一つで、筑前福岡藩によって開発されました。

この地域の石丁場は、当初は搬出に便利な海岸を選んで設けられましたが、順次山寄りに良材を求めるようになり、ここ(小松山)に新規開発の糸口がつくられたという意味で「口開丁場」と称され、小松石の名とともに世に知られるようになりました。

石工先祖碑

町役場前の高台の一角に「石工先祖碑」があります。この石碑から西・北側にかけての斜面・窪地一帯の地名「専祖畑」は、「石工先祖碑の立っている畑地」の意味で、専と先の字音が同じなので言い換えられたのでしょう。

碑面には、平安時代の頃、岩村にはじめて石工業を興した土屋格衛を、地元石材業の元祖と崇め、村にはまったく田がないのに百年来村人が飢えを知らない暮らしができるのも彼のおかげであるとして、報恩感謝の気持ちをこめて建てられたものです。

碑文は、古元業土屋格衛とあわせて、江戸時代に「口開丁場」(別項)を開発した筑前藩士と七人の石工を、石材業中興の祖として賛え、碑の傍らには七人の善工の墓石もあります。

現在の碑は、安政年間に三たび修造されたものです。

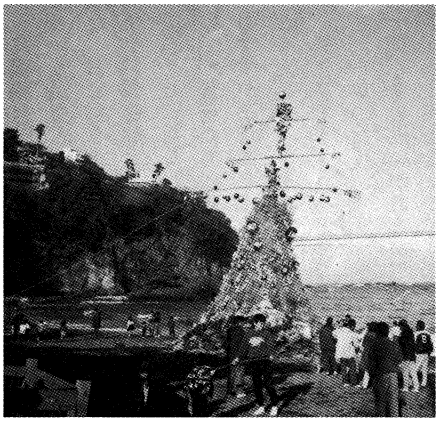
道祖神について

真鶴町では道祖神のことをサイノ神または訛ってセイノ神と呼び人々が生活している地域、集落へ災難や悪病がは入り込むのを防ぎ、良いことや幸運を呼ぶ神様として信仰されてきました。

昭和五十四年の調査のときには十一ケ所において道祖神がまつられていたことが確認されています。とくに町内でまつられている道祖神の石像は、僧形座像の伊豆型といわれる形で、小田原市内以東でまつられている船形後背を持ったものあるいは双体形のものとは明らかに異なっています。

道祖神の祭りは、特に子供の祭りとされ、オンベ宿と呼ばれる家に集まった子供達は餅を食べたり太鼓をたたいて遊んだりしました。正月十四日には、きれいに飾られた山車が出て町内を回り、夕方になると正月飾りや山から切り出した竹で作ったドンドン焼きと呼ばれるものを燃やして、その残り火で団子を焼いたりしました。

この祭りも昭和三十年代後半から下火となってしまいましたが現在は子供会の行事として復活したくさんの人が集まるようになりました。



郷土研究・郷土学習

真鶴町の過去・現在・未来

「真中祭での学級展示発表から」

真鶴町立真鶴中学校　一年三組

平成五年の真中祭のテーマは「時」と決まりました。私達の学級では、どのように参加するかということを話し合いましたが、「時」からの連想は、現在・過去・未来程度のものでした。そんな時、「岩専祖畑道と石工先祖碑」のことを話題に出した物知りがいました。ところが、そんな昔のことは難しいので、おじいさん・おばあさんから聞ける過去と、自分たちで想像できる未来を、現在と比較してまとめてみようということで学級展示を行いました。

…それらの一部を紹介します。…

◇

☆八町内

農　協　昭和五十二年ころまで映画館

診療所　昭和三十二年ころまでは住宅

肉の石川　昔は小さな店

谷平プロパン　昭和三十四年ころまでは空き地だった

昔は空き地や畑だった所が多い。

◇

☆六町内

愛久酒店周辺で取材しました。

ここは七十年前から営業を続けていた。この周辺は昔は真鶴銀座と呼ばれていたそうで、たいそう開けていたそうです。

その当時、愛久の前の道は海にいくためのメインストリートだったので、人通りも多く、店に寄る人が多くたいへんもうかったとのことでした。

当時と今は、ほとんど変わっていないが、道路は昔より広くなったそうです。昔の道路は人が歩くのが精一杯だったようで、狭いので土地を提供して広げたそうです。今でも狭いのに昔は本当に狭かったのだと分かりました。

将来はどうなるかということですが、地元の人だけでなく、観光客も楽しんでもらえる、のんびりと散策のできるおちついた坂道のある古い町並みになるのではないかと想像しています。

それにしても、ここが真鶴銀座とは思えませんでしたが、すごいんだなと思いました。

◇

☆十町内

今の一望閣の近くで調べました。

十町内は、昔はほとんどが森林の茂っている人の住んでいないところでした。三十年前ぐらいから、マンションやペンションが建ちはじめてきました。

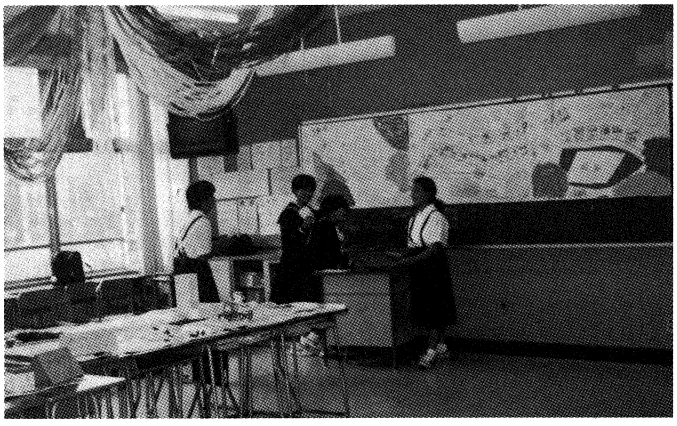
今は少し古くなった一望閣が建っていますが、未来は高級ホテルになっているでしょう。十町内はきっと、未来には、レストラン・ホテルなどがたくさんできて、有名な観光地になっていると予想します。

◇

☆調べた方法・わかったこと

町民センター・商店に行って昔のことを聞いた。

昔といっても、人によりいろいろの時代を話すので聞いていて、その時代がいつなのか混乱してしまった。



真鶴銀座・港に出る道はこれしかないという話など信じられないことが多かった。おじいさんおばあさんのもっと昔と今が、つながっていることがうそみたいに思えた。しかし、今と昔がつながっていて、自分たちが年寄りになった未来は、中学生がまた同じようなことを思うのかと考えたら、不思議だと思った。

歴史ってずーっとつながっていることがわかった。

昔と今の違いがあるが、真鶴町は海の利用という共通なことが続いてきたし、これからも海と真鶴町の関係は変わりがないような気がした。

☼☼☼

魚をとる仕事

三年　熊本詩織

りょうしさんは、としをとっている人が多いのがたいへんだと思いました。若い人がたくさんいないと、力仕事をするのがたいへんだと思いました。でも、よく若い人があまりいなくても、ていちあみや他の仕事ができたと思います。

これからもがんばって魚をとる仕事をしてほしいと思います。

石材加工のしごとを学習して

三年　青木良磨

ぼくが石材加工のしごとを学習してすごいと思ったことは、石を運ぶのにけがをしてしまうときがあるのに、それもかまわず、いっしょうけんめいしごとができるということです。

これからも町のためになんでもがんばる人をさがしたいです。

学校の昔を調べて

三年　穂坂　葵

社会科で昔の真づる小学校のことを調べて、いろいろなことがわかりました。

おじいさんやおばあさんの時代のことは、小林さんとし村さんのおじいさんが学校にきてくれて、じっさいに話を聞くことができました。

昔の学校は、校しゃがはんたいがわにたててあって、日あたりがわるく、あそびどうぐもあまりなかったそうです。科目の言い方もちがっていて、作文のことをつづりかた、算数のことを算じゅつと言っていたそうです。勉強するつくえには、ふたがついていて、一科目を五十分で勉強したそうです。

それに、きゅう食がなくて、みんなおべんとうをもってきたそうです。その中みは、日の丸べんとうだったということです。

今の学校は、校ていも広くて、日あたりもよく、あそびどうぐもたくさんあります。きゅう食もおかわりができて、まい日こんだてもちがいます。昔とくらべてとてもぜいたくだと思います。好ききらいをして、きゅう食をのこす人がいますが、とてももったいないことだと思いました。

おとしよりの話を聞いて、お父さんやお母さんに聞いてもわからなかった昔の学校のようすがわかって、とてもよかったと思いました。また、このような勉強をやりたいです。

今の校しゃとくらべるとずいぶん小さくて、木の校しゃだったんですね。

昔の真づる小学校
3年　篠原真美

楽しい郷土学習

岩小学校

小松石の見学をして

四年　岩本篤人

まず、昔と今の道具をくらべると、昔は「ヤジメ」「とびや」など初めて聞く名前の道具があり、いろいろな役わりがありました。今は機械も進み、昔は手でしていた仕事も今はだいぶ楽になりました。

次に、運び方は、昔はかついだり牛車やいかだの船で運びましたが、今はトラックや大きな船で運びます。

取れる日も、昔と今とくらべたら今の一か月が昔の十年でした。

小松石は、江戸時代に徳川家康が江戸城を作った時に使われ、今のように有名になりました。最近では昭和天皇のおはかにも使われました。

小松石の本当の色は「はい色」だけど二十年くらい前に青い石も見つかりました。はい色で大きくかたい良い石は百このうち一つか二つしかとれないそうです。

ぼくは、このような全国でも有名な小松石の取れる場所に生まれて大変うれしいです。これからも小松石のあるぼくの町、真鶴を大切にしていきたいと思います。

頼朝船出の地・真鶴

六年　宮川淳子

青木、五味は源頼朝のつけた姓です。この姓には深い意味がありました。

青木は、敵におわれた時、青木という木であなの入り口を囲んで守った人が頂いたもので、五味は、頼朝に五色のご飯をとどけそれが大変おいしかったため五味の姓を頂いたらしいです。

そんな意味がかくされていたとは知りませんでした。

源頼朝の船出の地が真鶴でしかもなんと、岩の海なので私はうれしく思いました。

私の住む町で

六年　中村友美

私達はいつもなにげなーく町中を歩いているけど、ほんのすこし昔はえらい人達がここ真鶴や岩を通ったんです。そんなの信じられないよね。たとえば源頼朝。頼朝が敵に追われてかくれた穴。今はもうわからないけど、その当時は大きな穴だった。このこと一つでも考えてみればすごいことなんだよね。

真鶴に青木姓が多いのは敵に追われた頼朝を青木という木で囲んで守ってくれた人達が頼朝より頂いたものなのですって。しゃれみたいだけど本当だよ。だからって青木がつく人がえらいわけじゃない。えらいのはこれから歴史を作ってい

く人達だよ。真鶴の歴史をあなたも語ってみては――。

「源 頼朝について学んだこと」

（話合い）

六年 K 細田耕佑
H 朝倉宏充
T 百瀬健

Hいろいろな説があるけれど、鎌倉幕府を開いた人が、同じ町に住んでいたなんて、ぼくはとてもおどろいたよ。

T日本を統一した人が、同じ町に住んでいたなんて、すごいことだよね。だけど、真鶴の町の人がいなければ、頼朝を助ける事はできないから、そのころの町の人たちは、すごくやさしい人たちなんだろうなぁ。

K戦いに敗れてしまい、命をねらわれた頼朝を助けたりしたら殺されるかもしれないのに、真鶴の人がそういうことをしたということは、頼朝の味方が多かったのかな。

Hあとでわかるけど、結果的には、真鶴の人たちは、頼朝が天下を取るための手伝いをしたことになったんだよ。

Kうん、そうだね。真鶴の人は、その道しるべをしたんだなぁ。

Tしとどの岩やにかくれた時、よく見つからなかったなぁ。

Kそうだよな、どうくつからしとどが飛び出したら、ふつうは見つかるのに、見つからない……これは神の導きだったのかな。

T大庭景親がみのがしたという説もあるよ。

Hとにかく、これからの歴史は、ぼくたちが作っていくんだから、よい歴史作りをしたいね。

（終わり）

文化財ミニ便り

○小早船の補修工事

県指定無形民俗文化財の貴船祭りに、「御座船」という重要な役割りをもつ二艘の小早船（貴宮丸・東明丸）の屋形部分の破損剝落が著しいため、貴船神社奉賛会では、県・町に補助を願い、補修彩色工事を行うために、栃木県日光市の小西美術工芸社に工事を発注しました。

工事の主な内容としては、欄間彫刻・獅子頭・欄間・破風尻等の平彩色塗り、柱・額・長押・土台・屋根等の黒朱漆塗り、彫刻や面の漆金箔押し、その他の木工事、錺金具の付替え等です。

二艘の工事費は、総額で四阡二百九拾六万八阡百拾参円の予算で、総額の四分の二を県の補助金で、四分の一を町の補助金、残りの四分の一を所有者（貴船神社奉賛会）負担で賄います。

工事は順調に進んでいるとのことで、去る十月十五日の文化財審議委員・貴船神社奉賛会員の視察によれば、金箔はり漆極彩色工程のすんだ欄間のすばらしさに感歎の声があがったとのことです。

二月二十六日には組立て検査も行なわれ、三月下旬の完成検査が済めば補修工事の完了となります。

今年の貴船祭りには、色鮮かな小早船がお目見えすることでしょう。

○寄贈文化財

平成五年度中に町で寄贈を受け、寄附採納の手続きを済ませた町指定文化財などは、次の通りです。

(1) 田広家文書（大学ノート）
町重要文化財指定　古文書の32

(2) 船網諸道具等歳数覚記
町重要文化財指定　古文書の31

(3) 紀州侯御用達船印・旗
町重要文化財指定　民俗資料の6

(4) 紀州侯御用達船印・木札
町重要文化財指定　民俗資料の7

(5) 手札
町重要文化財指定　民俗資料の8

(6) 古文書・民俗資料等
古文書十四点、民俗資料六点（未指定）

以上、田廣義一さんより寄贈

(7) 釈迦堂遺跡出土の石器（石斧等）黒曜石（石鏃等）土器片　（未指定）

(8) 釈迦堂遺跡出土の磨製石器二個
（未指定）

以上、森正利さんより寄贈

一部未展示の品物については、適当な折りをみて町民の皆様に紹介したいと考えています。

編集後記

◇ 文化財だより七号、岩地区の古道は岩道・土肥道・専祖畑道にスポットをあて、そこに点在する文化財について紹介いたしました。

紙面の関係で十分な紹介ができませんでしたが、これを機として、郷土の古道や文化財等に関心を持って頂けたら幸です。

なお、八号では、真鶴地区の古道の真鶴往還道・ぼら道・お林道等を紹介していく予定です。

◇ 本紙（七号）の執筆には、文化財審議委員さんに大変ご苦労をおかけしました。

また、町内の小・中学校の児童・生徒のみなさんからも、郷土学習や郷土研究の記録を寄せていただきました。

文化財だより七号、このように多くの方々のお力添えによりできあがりました。皆様方のご協力を感謝するとともに、今後のご援助もお願い申し上げます。